No.２７４９

奥深い静かな秋の道志山塊を歩く
朝日山～赤鞍ケ岳

実施日　２０１５年１１月１日（日）
天　候　晴れ時々曇り
リーダー　石原　勝正
参加者　涌井良明、島本陳重、小村井好枝、石附智恵　伊藤久雄、石原勝正、宇野輝代、徳山敬子、小名秀鋭、佐藤政司、濱田恵美子、（白石恵美子）、（瀧澤きよの）、()前泊テント泊　計１３名
費　用　JR560円(高尾駅起算)　🚌(上野原⇒無生野) 900円　🚗(久保⇒藤野駅) 1,500円　計2,960円
タイム　JR上野原駅(8:30~9:20🚌)無生野BS(9:30~11:10)サンショ平(11:15~11:50)朝日山(12:45~13:35)赤鞍ヶ岳(13:38~14:48)細茅の頭(14:55~15:15)長尾山(15:25~15:40)鳥井立(15:42~16:10)厳道峠(16:10~16:45)久保BS(17:10~17:50🚌)ＪＲ藤野駅

ＪＲ上野原駅から会員11人で無生野行き始発の富士急バスに乗車。コミュニティバスのようなミニバスであったがこぶし会の参加者11人貸し切状態で全員座席を確保することができて終点無生野バス停に向かう。残りの2名の参加者はすでに朝日山の登山口で前泊してバスグループに合流予定となっている。

奥深い山里・秋山郷の無生野バス停で下車し県道をしばらく進み赤倉岳バス停から左折して西タンノイリ沢に沿った林道に向かう。檜や杉の植林帯の暗い林道を１時間ほど歩き林道終点に到着。

合流予定のテント泊2名を探すが見つからない。合流まで待っていると寒さもきついのですでに朝日山に向かって出発したものと考え、赤鞍ヶ岳という小さい標識をみて山道に入り、沢にかかった堰堤を越える。

登山道は落ち葉で覆われて踏跡もわかりにくく歩き難い。沢筋を進むと二股となり右の沢に入る。暫く沢に沿って登るにつれて登山道を示す標識テープもわかりにくくなり、山と高原地図のルートで難路を示す破線と迷い道注意の表示の沢域に入る。

パーティ全員で目印のテープを確認しあいながら進む。ようやく左の尾根に向かって山腹を登るルートに取りつくと登るにつれて傾斜がきつくなり厳しさが増してくる。いつもは整備された登山道を歩くこぶし会山行に比較するとルート・ファインディングなどが求められるかなり難度の高い藪ルートに挑戦した山行となった。

幸い、秋に入り藪も少なく、また、沢登りの経験の深い朝霞組の助力を得て迷わず進む。

尾根に上がっても依然として急登が続き息切れがするほど厳しい。一方、周りの木々は檜や杉の暗い植林帯から明るい広葉樹林に変わり、赤や黄色に染まった紅葉が秋の日に映えて輝き次第に美しさも増してくる。暫く登り高度を稼ぐと左の棚の入山からの尾根道と合流するサンショ平（標識は棚の入）に出

る。サンショ平からは前方に紅葉に染まった朝日山を展望してから、尾根道を少し下って標高差200メートルを登ると朝日山の頂上に出る。朝日山頂上はカラマツ林に囲まれて展望はないものの明るい広場で赤鞍ヶ岳という標識が立てられている。

頂上広場で50分ほどの休憩と昼食、恒例の集合写真をとる。

テント泊2名とは登山ルートでも会えず頂上でも合流できないので予定外のルートを登ってきているらしい。やや心配であったがテント泊組には経験の深い山登りのベテランもいるので合流地点を先に延ばして厳道峠に向けて出発する。

頂上を少し下って道志側からの登山道との合流点が秋山峠である。秋山峠からの山道は、無生野からサンショ平までの難路と全く異なり背の低いスズタケが茂る整備された縦走路で快適に歩く。

落葉樹の鮮やかな紅葉とときどき見える左右の山郷の風情を楽しみながらいくつかの小さいピークを越えてウバガ岩を通り本来の赤鞍ヶ岳に着く。そこはスズタケの藪が刈り取られた小さな場所で三角点があるものの樹木に囲まれて展望もない。

とても頂上とは言えないような地味な場所である。

赤鞍ヶ岳からピークを１つ越えると道志村に下る道と厳道峠への分岐点を示す立派な標識があり、厳道峠へ向かう整備された左の道を選ぶ。途中でブナ林の藪に入る小さな厳道峠への道標に気付かず、誤って道志村への道を100メートルほど下ってしまい、後続するメンバーから指摘され登り返して本来の厳道峠への縦走路に戻る。このため20分ほど無駄な時間を費やしてしまったが後続のテント泊2名が我々に追いつき幸運にも参加者全員13名が合流することとなった。

尾根伝いに続く紅葉とスズタケの気持ち良い縦走路は細茅の頭、長尾山、電波塔のある鳥井立と3つのピークを過ぎて秋山郷と道志郷を繋ぐ車道（厳道峠）に着く。

この車道から左に分ける林道に入り道志みち（国道413号線）の久保バス停に下る。

予約したタクシーとの待ち合わせ時刻午後5時前にバス停に到着。やや遅れて迎えに来たタクシーに乗車しＪＲ藤野駅に向かう帰路についた。

（記＆写真・石原　勝正）

（写真提供・涌井　良明／伊藤　久雄）